

<講演>

上海にあった東亜同文書院について

現代中国学部教授・東亜同文書院大学記念センター長 馬場 毅

馬場 皆さんこんにちは。今ご紹介にあずかりました馬場でございます。これから東亜同文書院についてお話をするんですが、このあと井上先生が呉羽校舎のことについて、それから宮田先生には中国語教育についてお話しいただきます。従いまして私の役目は何かと言うと、全体的な東亜同文書院についてのお話をすることかなと思っております。ただ拝見いたしますと卒業生の方も含めてかなり詳しい方が何人もいらっしゃって、私としては最初から大変プレッシャーを感じているというのが正直なところでありますけれども、まあ何とか務めていきたいというふうに思います。

今日のお話は、まず東亜同文書院ができるまでのことと、それから東亜同文書院の教育の特色について私なりに4点まとめさせていただきます。それに即してお話をさせていただきたいと思います。お手元にあるパワーポイントのシート、ちょっと字が小さくて恐縮ですがそちらのほうもご覧いただければありがたいと思います。

最初に「東亜同文書院ができるまで」ということですが、その時にまず岸田吟香という人物の存在を消去することはできないと思います。この方は幕末にヘボンから英語を学んで、上海に渡って「和英語林集成」というのを翻訳刊行します。その後目薬をヘボンから学び、上海に樂善堂というものを作って目薬や本の販売を中国でやっていた。そういう意味では日本人最初の中国の実業家と言ってもいい方かと思えます。

そしてその下にいたのが荒尾精でありまして、彼は1886年に訪中します。陸軍中尉でありましたけれども岸田を頼って漢口の樂善堂を任される。同時に日本は当時中国の実情については分からなかったわけですが、その実情調

査をさせています。そして日清貿易研究所というのを上海に設置する。その性格はまさにビジネススクールと言っていいと思うんですが、学生に中国語をマスターさせると共に、中国の商慣習を体験させ、かつ中国とビジネスをする時に、私はこれ大変重要なことを荒尾は考えていたと思うんですが、「買弁」、買弁とは何かと言うと、たとえば19世紀にヨーロッパ(イギリス等)の商社が来た時に、だいたい最初は開港場(貿易ができる港)の外へ出られなかったせいもあるんですけれども、そのために中国人を雇ってお茶を買い付けたりしている。やがてその買弁と言われる人達は、外資で経営のノウハウを身に付け、資金を獲得して、20世紀になると毛沢東なんか「買弁資本家」と言ってますけれども、資本家になっていく。必ずヨーロッパ人が来た時に買弁を使って中国と商取引をした。ところが日清貿易研究所は日本人が直に、買弁を用いずビジネスをすることを目的とした。このことは基本的に東亜同文書院にも引き継がれます。私は大変気宇壮大なことを考えていたなというふうに思っています。

今日本が中国に出ていった時に、必ず中国側の企業と組んだりしてやっております。ところが日清貿易研究所も東亜同文書院も、この買弁を介在させないで中国人と直に商売することを考えていた。これは私は大変すごいことを考えていたんだなというふうに思っています。この時根津一も参加していました。この根津一が後に東亜同文書院の院長になって大きな影響を与えていきます。この当時の実情調査を元にして荒尾精が根津一に「清国通商綜覧」を書かせ、当時全く分からなかった中国、特に清国の商況について総括的に述べて、大変好評を博したと聞

いております。

これが特に東亜同文書院関係の大変重要な3名の方でありまして、左側が近衛篤麿です。

貴族院議長を務めて、東亜同文書院の経営母体である東亜同文会の会長を務めました。真ん中が荒尾精、右側が根津一であります。この3名の方がやっぱり東亜同文書院創立期に大変重要な役割を果たされたというふうに思います。



ところで日清戦争が終わって列強による中国分割の旗幟が大変起きる。日本の場合は台湾を植民地化し、対岸の福建、台湾での勢力を拡大しようとしてついで遼東半島も勢力範囲にしようとしていました。その他ドイツが山東半島とか、イギリスが長江流域とか、ロシアは満洲とか。そういうふうに列強が分割をするかもしれないところで、ロシアが同時に朝鮮半島に勢力を伸ばそうとして、その点で日本ともやはり対立してくる。そういう状況の中で、東亜会と同文会という2つの組織ができます。

東亜会のほうは陸羯南、三宅雪嶺、池辺三山と、ジャーナリストとして大変有名な人達で、陸羯南なんかは日本で当時の政府を批判するとともに、NHK のドラマ「坂の上の雲」に関係しますが、それでも正岡子規を記者として雇って記事を書かせたりしている。こういう3名のジャーナリストや、荒尾の弟子であった井上雅二、それから翌98年戊戌の変法が起きますけれどもその時に康有為の同志であった梁啓超、つまり中国の改革をやるようとする人達も参加してくる。この時期まだはっきりとした孫文の支援者ではありませんが後に孫文の支援者となる犬養毅とか、宮崎滔天とか、黒龍会の創立者でもある内田良平とか、平山周とか、尾崎行正達が参加します。東亜会

は一言で言うと、当時の中国を改革しようという中国の人達とも連携して、中国を改革しようという支援者が多かったように思います。

一方同文会の方ですが、先ほどの近衛篤麿さんの他に宗方小太郎、この人は漢口楽善堂ですので、そういう意味では岸田吟香以来の仲間です。それから白岩龍平、これは日清貿易研究所。それから岸田吟香。大内暢三、この人は近衛の側近であります。同文会のグループは一言で言うと、中国との商業活動に携わった実務派が多い。東亜会と同文会とは性格が少し違うんですけども、その両者が合併して98年に東亜同文会ができます。会長が近衛篤麿、幹事長が陸羯南です。綱領を見ますと「支那(中国)を保全する。分割の危機を迎えている中国を守っていかう。さらに支那および朝鮮の改善を助成する」。そういう改革もある程度支援しよう。

この時大きな問題になったのが、梁啓超等外国人の会員をどうするかということです。正会員として認めるかどうか。結局外国人会員は正会員ではなく会友となりまして、そういう意味で東亜同文会は中国内部の政治党派、特に改革を志向している政治党派とは一線を画しています。同時に趣意書の中では清朝体制の維持を明確にしてあります。そういう意味では東亜会ではなくて同文会の路線を継承しているというふうに思います。

そしてその東亜同文会が最も力を入れていたのが教育文化事業でありまして、最初近衛会長が1900年に劉坤一の援助を得て南京に東亜同文書院を作ります。劉坤一は南京にある江蘇省を統括する两江総督で、大変有名な人物です。19世紀の1860年代から中国で欧米の軍事規律を入れて改革をしようという洋務運動というのが起きますが、その時のリーダーの1人です。南京の東亜同文書院の院長は、先ほど出てきました荒尾精の同志であった根津一です。

ところが1900年は北方で義和団および清朝政府と八ヶ国連合軍が戦争をします。日本は一番多くの兵隊を出兵し、軍紀が一番良かったの

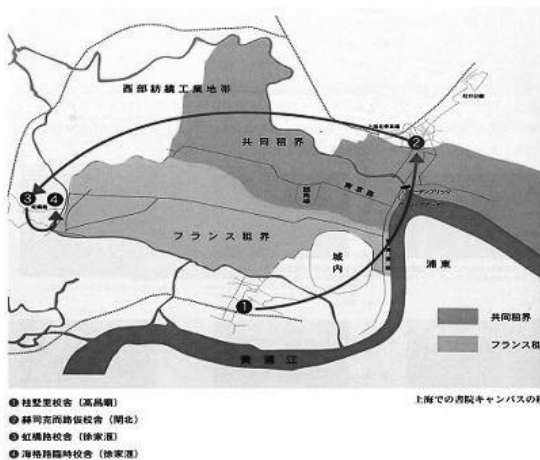
が日本兵だと言われていますけれども、この義和団事件のため存続できなくて、1901年上海の同文書院に併合されます。東亜同文書院は最初から日本人の学生の育成と中国人の学生の育成という2つの大きな柱を持っていました。東京の同文書院は1901年から22年まで続きますけれども、中国人留学生を受け入れて、日本の高等専門学校などへ進む予備校としています。課程は2年です。

ちょっと話が前後しましたがけれども、1901年に上海同文書院が設立されます。院長が根津一で、基本的に日清貿易研究所のカリキュラムを継承し、先ほど申し上げたように中国人の買弁を用いず直に中国人と商売・貿易をする。そういう貿易実務を学ぶ専門学校として作られます。先ほど申し上げました両江総督の劉坤一の援助も受けて、外国人租界外に作られます。つまり中国から言えば外国人の作った教育機関なんですけど、一貫して租界の外に置かれた。これは同文書院の特色であります。後に1913年、辛亥革命のあと、袁世凱の独裁に対して孫文が起こした第二革命の時に最初の校舎は焼けます。課程は3年になります。これが最初の校舎です。ここが共同租界でありまして、ここがフランス租界です。全て租界の外に置いてあります。焼けたあとここに仮校舎ができ、ここが3番目の校舎です。徐家匯の虹橋路のところに来たもので、そしてこれが後に言いますけど盧溝橋事変のあと焼かれて、この向かい側の上海交通大学のあ

ったところの校舎を借りたのがこの4番目です。見ていただければ一目瞭然でありまして、全て租界の外に作っているというのが特色です。ちょっと小さくて恐縮ですが、初期(1908年)の授業科目で院長さんは根津一ですが、見ていただくと語学で中国語とか英語、それから法律、経済、さらに商業慣行という形で中・英ならびに貿易に関係するような実務的な科目を置いているという特色があります。

その上で私は東亜同文書院の特色を4点まとめてお話させていただきたいと思うんですけど、第1点は経営母体の東亜同文会のアジア主義的性格を体現しています。明治維新以後日本政府はご存じのように欧米をモデルにして、まさに福沢諭吉の言ってる「脱亜入欧」をやったわけですけども、東亜同文会は支那保全論に見られますように、列強による中国の分割に反対しました。東亜同文書院の開校時の「創立東亜同文書院要領」の「興學要旨」も東亜同文会の趣旨を受けて、「中外の實學を講じて中日の英才を教え、一には以て中國富強の本を立て、一には以て中日揖協の根を固む。期するところは中國を保全して東亞久安の策を定め、宇内永和の計をたつるにあり」というふうに述べております。簡単に言いますと実學を学んで、日本人だけではなく中国人の人材も育成を行なって、中国の富強の基礎を固め、日中連携しての列強からの東亜保全、東アジアを保全することを目的とすると。

ちょうど東亜同文書院ができた1901年というのは、日本は台湾を植民地化していますけれども、結局日清戦争の後の三国干渉に対して抗し得なかったという意味では弱小国であります。その点で分割の危機を迎えていた中国と共通の状況であり、東亜同文書院の掲げた日中連携の理念は、現実的に実現の可能性を持っていたというふうに私は考えます。しかしながら日露戦争後の日本の列強化、帝国主義化による相互の状況の相違、1915年の21か条要求以後の対中侵略の展開、対中関係の緊張と共に日中連携



の現実的可能性は徐々に失われていったと思います。しかしながら東亜同文書院は一貫してこのアジア主義的な理念を掲げていった。これは大変注目すべきことであると私は思っております。これが1つ目です。

2つ目が現地主義と実用主義ということですが、中国との貿易を担う人材の養成のために、日本の教育機関にもかかわらず、中国現地の上海の、しかも租界の外に学校を置いたという。最近日本人の若者が留学しないというのが新聞紙上に出ておりますけれども、それに比べれば100年以上前に中国現地に、中国から言えば外国の学校を作って人材を養成した。これは本当に卓見だったというふうに思います。

一般的に中国語を日本語で読む漢文文化、誤解なきように言っておきますが私は漢文文化を否定してはおりません。ただ中国語を外国語として勉強するというのを、やっぱりちゃんとしなくちゃいけないという点を、腰を据えてやったのが東亜同文書院だと思います。その点はまた宮田先生のほうからお話があるかと思えます。そういうふうに中国語を学ぶこと、カリキュラムにおいて登記実務に関連することを重視したという、そういう点での実用主義というのが2つ目かと思えます。

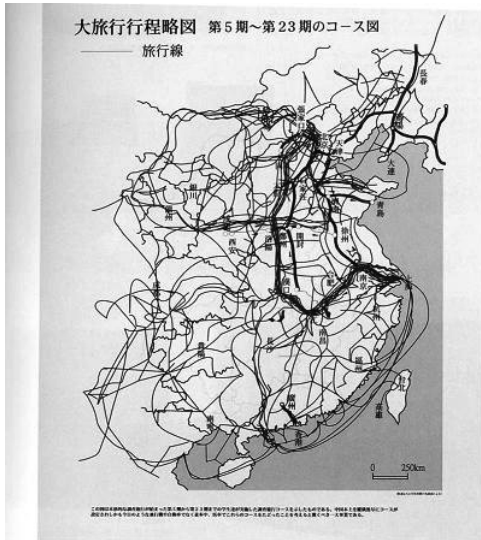
3番目が社会調査、フィールドワークを、これはもう世界に先駆けてと言っていると思うんですけど、先駆的に行なったということでもあります。「大旅行」と東亜同文書院では言っていましたけれども、1902年に日本はロシアの中国進出に対して日英同盟を結びました。ロシアが中央アジアへ、東部蒙古に対して出てくるので、イギリス政府からロシアの西域、現在の新疆ウイグル自治区および東部蒙古への進出に対する調査依頼が日本の外務省にあって、外務省の依頼を受けた根津院長が1905年から6年にかけて2期生の卒業生、林出賢次郎、波多野養作等5人を、西域と呼ばれる新疆ウイグル自治区(かつてのシルクロードの地域)および東部内蒙古に派遣して、彼等が使命達成後外務省に報告しま

す。

1907年外務省からこの補助費として3万円が支給されました。これがきっかけになります。書院生はこのお金を、5期生が3年になった1907年から3年間、調査旅行の費用に当て、最終年次の3年次に中国各地へ行って調査を行なう大旅行が始まります。経費の面では外務省の資金は3年で無くなっちゃいましたので、その後書院が独自に経費を支出し、さらにまた経費の一部には外務省の補助金も支給されました。1905年の調査は外務省の依頼による国家の調査でしたけれども、その後の調査は東亜同文書院独自の中国各地に対する社会調査となったというふうに思います。

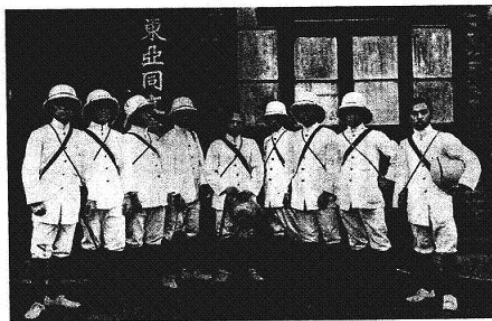
当時はもちろん今みたいに交通が便利じゃありませんから、彼等は数人あるいは5~6人で1つの班を編成し、ライカのカメラを持って農村を中心にして馬車を用いたり歩いて移動をした。だいたい5月から8~9月にかけてやったようですが、それを卒業論文としてまとめるというのが東亜同文書院の習慣でした。最初は商取引中心だったんですけど、その後さまざまな地域調査をやっていく。特に指導者として馬場鉄太郎さんという経済地理学をやった方の功績は大きい。これは藤田先生のご見解です。

その後支那研究部が成立されると、この支那研究部が調査旅行を指導することになります。これが学生が行ったところの地図であります。1905年から23年。太いところが大旅行で行っているところですよ。これを見てもらえば中国をほとんどくまなく、列車や飛行機を使ったわけじゃなくて、歩いて行っているということがお分かりになるかと思えます。



第5期～第23期のコース図
1905～1923年の時期、中国の主要地域は勿論、辺境の地まで踏査していることが分かる(藤田佳久「支」ではない(東亜同文書院と東亜同文書院大学)、『愛知大学東亜同文書院大学記念センター編『東亜同文書院大学と愛知大学』六甲出版、1993年)より。

なんかアフリカ探検隊みたいな格好をしますけど、中国人が見たら一目で外国人だというのが分かると思いますね。こういう格好をして調査をしていった。



樋口勇 藤井敏一 小西茂 藤田謙 野田輝 岡谷止郎
頭田佐七 藤藤清之助 佐伯廣
(写真C) 東亜同文書院第13期生のうち、江西コース出発時の一行(『藝叢』より)

一方この大旅行に対して中国側はどうか。清朝存続の時から始まって、中華民国政府に引き継がれますけれども、それぞれ中国側は執照(許可証)を発行し、そこに学生達の訪問先が書いてあって、中国側ルート沿いの清朝で言うと知県、民国で言うと県長、日本で言うと県知事に連絡をします。学生が行くとまず知県なり県長に挨拶をする。そうするといろいろ便宜を図ってくれる。中には書院生のために兵隊を護衛に付けたところもあったように聞いております。

この時期中国の治安は大変悪くて、土匪と言

われる匪賊(往々にして人質を誘拐して身代金を要求したりする)が各地にいるし、1911年に辛亥革命が起きます。24年から第1次国共合作の下で国民革命が起きます。さらに1916年袁世凱が死んだあと28年まで、袁世凱の部下の軍人達による中央政権および地方政権をめぐる内戦がたびたび起きています。そういう治安の悪いところをずっと旅行しているわけですが、大旅行は1人の事故も無く終わりました。これはやっぱり中国側の協力もあったからだと思います。ただし満州事変が始まりますと中華民国政府はこの執照を発行しませんでしたので、学生達の行先は先ほどの地図みたいに中国全土というわけにはいかなくなりました。

これが執照ですけれども、どこが出ているかと言うと上海市の公安局が出ております。確かこれは田中さんという方だと思います。中を見ると護照、今で言うパスポートの役割を持つという文章が出ておりまして、これを持って旅行をして県長に見せる。そうするとまあ身の安全が保証されるという。ここに写真が貼ってあります。



調査結果の報告はたとえば『支那経済全書』。これは第1期から第4期までの調査報告によって作られております。それから各省別の状況を説明した2度にわたる『支那省別全誌』。これも学生の調査報告も利用して作っています。東亜同文書院の刊行物としては時論誌として『東亜時論』、『東亜同文会報告』、『支那』という雑誌、それから支那研究部が1920年にできて本格的な中国研究がはじまりますと、『支那研究』、『東

『東亜研究』という雑誌を出しております。各種年鑑も出ておりまして、この年鑑は現在も日本の出版社が復刻しております。そしてけっこう売れている。つまり当時出された年鑑が今でも中華民国時期のことをいろいろ調べるのに、充分商業ベースにも乗るといことでありまして、そういう意味では大変有用なものだと思います。

4番目の特色として「日中連携を目的とした中国人人材の育成」ということですが、先ほど申し上げましたように東亜同文書院は初期から東京同文書院を設置して、日本人だけではなく中国人人材も育成しようということをやっていました。東亜同文書院は1922年ですが、新たに中華学生部というのを東亜同文書院の中に作ろうとした。東京ではなくて上海にそれを作るわけですが、直接的にはそこに書きました帝国議会の決議を受けて、外務省が東亜同文会に対して東亜同文書院内部に中国人教育のための付属実業学堂を創設することを命令し、それを院長が受けて、3番目の校舎になるんですけど徐家匯の虹橋路の校舎を建設。2番目の江北の東のほうにありました海格路(同文書院の人達はハスケルロとそのまま読みます)の仮校舎より移転します。その一角に中華学生部を作りました。これが徐家匯のところの虹橋路の有名なキャンパスです。

中華学生部は1918年にできるんですが、中国人学生は全寮制でした。1934年にとうとう廃止されるんですけど、約400名中国人学生が入学します。ただし転学したり退学したりした者が続出して、卒業したのは僅か50名でした。これには非常に当時の日中関係が影響しておりまして、そもそも18年に作ろうとして人集めをするんですが、1919年には日本がドイツから継承した山東権益を中国に返せという中国側の要求がベルサイユ条約で否決されたあと、北京の学生が天安門広場で5月4日から「青島を返せ」という有名な五四運動をやっていく。つまり排日運動が起きる。そういう中で人集めをせざるを得なかった。従って募集は大変困難を極めます。よう

やく20年になって1年間の予科に6名入学。この連中は翌年本科に進学して日本人と共に授業を受けます。

1925年には「五・三〇運動」、これはもともとは山東の日系資本の紡績工場に対するストライキから始まって上海に飛び火をし、その時イギリスの警察が発砲したので、排日から排英に変わりますけれども、最初は排日だった。そうした排日運動が行なわれる中で中華学生部の中にも上海の学生連合会と一緒にストライキをやる人間も出てくる。名前が分かっているのたとえば梅雲龍(梅龔彬ともいいます)。この人物は25年に国民党上海執行部で工作すると共に、当時第一次国共合作ですから、共産党にも入党して、最終的に大陸に残ったようで、文革の時に迫害されています。おそらく東亜同文書院と関係を持ったことがその口実になったのではないかというふうに思います。

28年、これは蒋介石の率いる国民革命軍が、北方の北京政府を倒そうとして北伐をやっていく途中で、日本の田中義一内閣が居留民保護を口実に軍隊を派遣し、軍事力で国民革命軍を阻止しようとして中国軍と衝突した。その時にも上海学生連合会は排日委員会を組織して、中華学生部に10日間のストライキを要求しています。それに中華学生部の学生が呼応する。

20年代の終わりから特に30年代の初めは、日本人の学生の中にも左翼学生が出現して、30年11月には副院長と教頭の辞任要求を出して全学ストライキを行ないます。それから当時は日本人でも中国の共産党組織に入れたもんですから、中国共産党の下部組織「共青团」の書院支部に入った人がいた。このストライキの最中に上海の領事館警察が学生寮を急襲して8名の学生を逮捕し、共青团支部は大打撃を受けます。

その後31年9月に共青团支部が再建され、ちょうどこの9月18日から満州事変が始まるわけですが、12月に中国に対して軍事力を行使するのに反対する「対支非干渉同盟」というのに

参加して、日本の侵略運動に反対する運動を行ないます。特に日本軍の水兵に対する反戦工作を行ないませんが、33年3月総領事警察が書院学生の寮を急襲して、卒業者を含め19名が逮捕され、書院内部にありました日本人学生の中国共産党書院支部は潰滅します。その後勢力が回復することはありませんでした。

このように一部の日本人左翼学生の中で反戦運動が行なわれましたけれども、今申し上げたような満州事変、第一次上海事変の発生以後、非常にやっぱり排日というのが強くなって、中華学生部は退学者が続出して廃止されます。このように日本の21か条要求以後の日中関係の緊張、対中侵略の進展に伴い、この試みは当初の目的を果たせませんでした。この時期になると日中連携しての人材育成という東亜同文書院の理念は実現できる現実的基盤を失います。

皮肉なことに中華学生部は排日運動の拠点となったんですが、これは実はマクロな話でありまして、最近私気が付いたんですが、坂本義和さんという有名な政治学者がいらっしゃいますけれども、その父親義孝さんは1925年から31年まで中華学生部の学生部長でした。そして中国人学生が逮捕されたら、たとえば領事館警察に行くと、釈放要求と、それから貰い下げをしている。領事館警察から「お前はそれでも日本人か」と罵倒されたというようなことが書いてあります。27年に蒋介石の「四・一二クーデター」が起きて共産党員と目された労働者や学生達が捕まりますけれども、たまたま書院の中華学生部の学生でその時救われた人がいた。日本が負けたあと上海に国民党軍が入ってきた。馬に乗って入ってきたのが坂本さんの顔を見て下馬をして、「ご無沙汰しています。大変お世話になりました」という挨拶をしたという有名な話が残ってます。これは最近岩波新書の本で私は初めて知ったんですけれども、つまり大状況の中でそういうふうな行動を示された方がいらっしゃるということですね。義孝さんは東亜同文書院が日中の学生を提携して育成しようということに大変共鳴を抱か

れていたと聞いております。

盧溝橋事件のあと第二次上海事変が起きて書院生は長崎に引き揚げます。当時も中国の調査旅行をやっていたというのは大変度胸が据わっていたと思いますけれども、途中で中止になります。4年生80人は6か月通訳従軍に参加して、戦争の実態を知って大変ショックを受けたと言われています。東亜同文書院の校舎は中国軍によって接收されます。何しろ租界の外ですから、日本軍が合法的には守れない。盧溝橋事件のあと先ほどお見せした校舎が中国軍により焼かれ、図書館や膨大な中国調査書・報告書が焼失します。そのあとこの向かい側のところの上海交通大学の校舎を借用して授業を再開し、39年大学に昇格します。

やっぱり呉羽のことをひとこと言っておかないといけないわけで、これは後ほど井上先生から詳しくお話があると思いますけれども、45年の入学生はアメリカ軍の潜水艦が出て危なくて海を渡れず、富山市の呉羽航空機株式会社(旧呉羽紡)の建物に校舎を借用して呉羽分校を開学します。日本の敗戦を挟んで7月から11月まで。

その後結局東亜同文書院がどうなったかということですが、日本敗戦後上海の校舎は中国側に接收されて東亜同文書院は閉校となります。同文会の会長でありました篤磨さんの息子の文磨さんは戦犯に指名される。東亜同文会も建物をGHQに占拠されて解散する。一時呉羽で東亜同文書院を継続させようという試みがあったように聞いておりますけれども、それも実現できない。そういう中で東亜同文書院大学の教員や学生、台北帝大、ソウルの京城帝大の、外地にあった教育機関の教員と学生が一緒になって、当時予備士官学校のあった愛知県豊橋に愛知大学を設立しました。GHQの意向もあり公的には東亜同文書院と別個の大学とします。ただし設立の中心となったのは東亜同文書院大学最後の学長で、のちに愛知大学の第2代・第4代学長となった本間喜一です。お嬢様が本

日ご参加いただいておりますけれども。

そのように東亜同文書院大学の教員や学生が多数を占めます。これが旧愛知大学の本館です。第15師団司令部のあったところだと思います。今の記念センターのある場所です。ところで多くの卒業生の方々は戦後さまざまな分野で日中友好の架け橋となるようなご活躍をされている。いちいちお名前は申し上げませんが、やはり戦争中自らの思いとは裏腹に中国と戦わざるを得なかったということがあったかと思います。

愛知大学のことについては先ほど学長が言われたので省略します。最後に現在中国やインドを始めとしてアジア経済の発展が目ざましく、前の鳩山首相が東アジア共同体の結成ということをおっしゃっておりますけれども、そういう中で1901年、100年以上前からアジア主義的な性格、中国現地で育てようということ、貿易実務に関する科目を教えるという実用主義、中国現地を学生達が自ら歩きながらフィールドワークをやるという社会調査、それから日本人だけでなく中国人の人材も育成しよう、そして日中連携を行なっていくという東亜同文書院のアジア主義は、先ほどの中華学生部の歴史も戦前戦中の日本のアジア主義の縮図だと私は思っております。この4点は今後の日本のアジアへの向き合い方に多大のヒントを与えていると私は考えております。決して45年に消失した過去の大学(もちろん愛知大学はその精神を継承しておりますけれども)ということだけではなく、今なお十分に再評価すべきではないかというのが私のお話の結論であります。

若干時間がオーバー致しました。ご清聴を感謝致します。

司会 馬場先生ありがとうございました。本日馬場先生は講演会のあと午後6時まで隣の展示室にお見えになりますので、ご講演に関してのご質問等がございましたら展示会場のほうまでお越しいただければと思います。

では準備の間に井上先生のプロフィールをご

紹介させていただきます。これからご講演いただきます井上弘先生は1929年(昭和4年)、現在の富山県氷見市のお生まれ。旧制氷見中学校を経て東亜同文書院大学呉羽分校に入学されました。1947年愛知大学に編入学され、1952年愛知大学法経学部経済科をご卒業。旧三井銀行に就職され、三井銀行本店営業部調査役などを歴任されました。また富山市民国際交流協会、国際教養委員会副委員長等もお務めになりました。では今から東亜同文書院大学第46期生の井上弘先生に「東亜同文書院呉羽分校」の題でご講演いただきます。井上先生よろしくお願いたします。